

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

宮崎 恒二



学位申請者 澤井 志保

論文名 競合する語り：香港で働くインドネシア人家事労働者によるイスラーム文学創作グループ「ペン・サークル・フォーラム香港」

【審査の経過と結論】

澤井志保氏から博士学位請求論文「競合する語り：香港で働くインドネシア人家事労働者によるイスラーム文学創作グループ「ペン・サークル・フォーラム香港」が提出されたことを受け、2015年3月12日開催の総合国際学研究所教授会にて審査委員会が選任され、学位審査が開始された。

審査委員会は、文化人類学の宮崎恒二を主査とし、副査として、主指導教員でインドネシア史・インドネシア地域研究の青山亨教授、哲学・カルチュラル・スタディーズを専門とする岩崎稔教授、文化人類学・宗教研究の土佐桂子教授に、外部からインドネシア文学を専門とする森山幹弘南山大学教授を招き、これら5名の委員で構成された。

審査委員は、それぞれ専門の見地から論文を精査し、内容を詳細に検討した上で、2015年5月25日に公開の最終試験をおこなった。その後、論文および最終試験の内容について協議をおこない、審査委員会は全員一致で、澤井志保氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。

論文および審査の概要は以下の通りである。

【論文の概要】

本論文は、香港で働くインドネシア人女性家事労働者が主催するイスラーム文学創作運動であるペン・サークル・フォーラム香港の活動を取り上げ、2004年の組織創立の経緯、活動におけるメンバーの語り、創作された作品の言説の分析を通して、ジェンダー、国籍、宗教、職業の多層なレベルで周縁化されているインドネシア人女性家事労働者が、様々な問題に対して「望ましい自己像」をいかに実現しているかを明らかにするものである。

これまで国際移住家事労働者の研究は、労働の側面に焦点を当てるものが中心で、労働者が余暇時間に行う社会運動の意義について焦点を当てるものは少なく、さらにその中で、宗教のもつ意味を本格的に分析する研究はなされてこなかった。

本論文は、現地調査による活動メンバーたちへの取材と、彼女たち自身が描き出した文学作品の分析を詳細に行うことで、ペン・サークル・フォーラム香港の活動は、その射程が狭い意味での宗教や文学の領域に留まるものではなく、当事者であるインドネシア人女性家事労働者たちが、グローバル化する家事労働の現場の中で、イスラームを「批判的」に解釈することで、国際移住家事労働者の女性としての多面的な主体性を自己肯定的に読み解き直すプロセスであることを明らかにする。

本論文は、以下のような構成をとっている。

序論

第1章 先行研究の検討

第2章 調査の手法

第3章 FLP 香港の設立の経緯—インドネシアと香港

第4章 FLP 香港の活動形態

第5章 月刊プレティンに描かれる概念の整理

第6章 短編小説集のテキスト分析

結論

序論では、本論の主旨、課題、全体の構成が提示されている。

第1章では、先行研究を検討する。家事や介護に代表される、生産領域以外の産業においてグローバル化が進展することで女性の国際移動が活発化している。本論文は、このような生産領域の外でのグローバル化を「親密性労働のグローバル化」と規定し、その典型として国際移住家事労働に焦点を当てる。従来の国際移住家事労働者の研究は、労働に焦点をあててきたが、本論文では、家事労働者が労働時間外で行う社会運動に焦点を当てることで、家事労働の多面的な理解を試みる。

また、本論文は、社会運動の原動力を経済的合理性と価値観的合理の二つに分けたうえで、社会的周縁に位置する集団は、独自の価値観を共有することで、限られた資源を駆使して、現実の制限を乗り越えたと主張するフェルを援用するが、現実の社会運動では、経済的合理性と価値観的合理性は二者択一的なものではなく、組み合わさっているという認識に立つ。

香港における国際移住家事労働者の社会運動に関しては、多くの示唆的な研究がなされてきた。しかし、インドネシア人女性家事労働者の多くがムスリムであるにも関わらず、インドネシア人女性家事労働者の社会運動について、これまで宗教という視点から、かつ長期的な調査を積み重ねた研究は行われてこなかった。インドネシア人女性家事労働者の宗教的文学創作運動を取り上げる本論文は、この欠落を埋めるものである。

本論文では、社会運動の「語り」の分析対象として、社会運動のメンバーの発言とメンバーによって創作された文学テキストを用いるが、分析の視点として、エージェンシーとしての人は、文化を「道具」として組み合わせることで、構造の制約に適応し、自分なりの行動規範を選びとる、とするスウィドラーの「道具セット」としての文化の概念と、自己についての語りにおいて、語り手は一般的な表現（例えば「レイプの被害者」）を新たな表現（例えば「レイプのサバイバー」）と言い換えることで、一般的な文脈を転覆して再文脈化し、自己の再定義をおこなうことで、社会運動のなかで望ましい自己を実現もしくは回復する、とするポーレッタの「メトニミー」的な自己再定義の概念を援用する。ここでは「メトミニー」は換喩と隠喩が混合した記号を意味する。

最後に、イスラーム運動については、イスラーム運動の文化的側面、とりわけジェンダー化された価値観への影響に限定して、先行研究を参照する。インドネシアでは、経済成長による中間層の台頭と権威主義体制の崩壊を背景に勃興したイスラーム的消費文化と、望ましい女性の役割を親密圏の中の妻ないし母と定義するイスラーム的価値観の間で、多くのムスリム女性が葛藤を抱いている。本論文では、インドネシア人ムスリム女性のエージェンシーを、教義に従って振る舞おうとする「実践的エージェンシー」と、教義を現実にあわせて再解釈する「批判的エージェンシー」に分けて理解するリアルドの研究によりつつも、両者が重なり、互いに影響し合う関係にあるという認識に立って、社会運動のメンバ

一たちが行う教義と現実の間の交渉を明らかにしようとする。

第2章では、調査の方法を述べる。2008年10月から2009年3月までの6か月間の香港で現地調査をおこない、FLP香港の定例ミーティングに出席しての参与観察、メンバーを対象にした質問票調査、中心的メンバーに対する半構造化インタビューを実施した。加えて、香港在住のインドネシア人コミュニティ・リーダーに対してインタビューを実施した。2010年3月に香港で3週間の追加調査をおこなったほか、2011年7月にはインドネシアにおいてFLP香港メンバー16名の故郷を訪問し、追加調査をおこなった。調査時のFLP香港のメンバーは女性35名、平均年齢29歳、74%の最終学歴が高卒であった。一次資料としては、FLP香港による商業出版物2点、FLP香港が創設以来発刊している月刊ブレティンのバックナンバー49冊を主な分析の対象とした。また、2006年9月から2008年8月までの留学時に行った文学出版に関する調査で得られた資料も利用している。

第3章では、FLP香港の設立の経緯を、インドネシア社会と香港の状況の交錯点において描きだす。インドネシアでは、権威主義体制崩壊後の言論の自由化と都市中間層の台頭による出版産業の拡大や地方都市での新興小規模出版社の増大を背景に、多様な文学コミュニティ（コミュニティ）が出現した。中でも、イスラーム文学の市場の広がりから生まれたイスラーム系のペン・サークル・フォーラム（FLP）は、「ペンによるダアワ（イスラームへの呼び掛け）」をモットーとして、社会運動としての性格をもつ。他方、労働者の権利が保障された香港においては、国際移住家事労働者による多様な社会運動が展開していた。そのような運動の中の一つとして文学創作活動があったことが、2004年になってインドネシア人女性家事労働者によるFLP香港支部の設立とメンバーの文学作品を掲載した月刊ブレティンの発刊につながった。

第4章では、現地調査に基づきFLP香港の活動形態を記述する。FLP香港のメンバーは月2回休日の定例ミーティングに「家」としてのヴィクトリア公園で開催し、ブレティンの編集、作品の合評、イベント開催の連絡などをおこなう。この過程が、コンピュータ・スキル、創作の技法、マネジメント・スキルの獲得などを通じて、インドネシア人女性家事労働者のエンパワーメントの機会となっていることが明らかにされた。また、FLP香港の活動への継続的な参加が、家事労働者として、また、非イスラーム社会におけるムスリム少数派として、雇用主とのたゆまない交渉を必要としていることで、「主体性の操縦」の場となっていることが明らかにされた。

第5章では、月刊ブレティンに掲載された短編小説および巻頭言、メンバーが本音を語る随想に描かれる概念を分析することから、家事労働者としての脆弱な立場にあつて、文学創作によって「主体性の操縦」を行うインドネシア人女性家事労働者の姿が照射された。メンバーの連帯と「ペンによるダアワ」を通じた自立、雇用主への正義の要求、移住労働による金銭的報酬と宗教的価値との葛藤、恋愛と結婚をめぐる「望ましい女性像」の揺れが、主なテーマとして抽出された。

第6章では、FLP香港が出版した2冊の短編小説集のテキストから9点のテキストを選び出して精緻に分析し、「語りの競合」について検討する。テキスト中に描かれたインドネシア人女性家事労働者の主人公に関わるメトニミー（換喩的記号）の二項対立性を詳細に分析し、意味の転覆と再文脈化が行われるプロセスを「語りの競合」として明らかにする。テキストの分析から「国際移住家事労働」、「望ましい女性像」、「雇用者との権力関係」という共通する3つのテーマが抽出された。テキストの中では、国際移住家事労働が含意する社会的地位の低さ、悲惨な経験、能力の低さという記号が宗教的正当性、幸せな経験、能力の高さへと転覆されて読み替えられ、再分節化される。望ましい女性像では、ト

レンディな女性像と垢抜けない女性像、レズビアンやトムボーイを承認するジェンダー関係と正統的異性愛規範をそれぞれ体現するキャラクターが競合する語りとして対照的に描かれる。雇用者との権力関係では、インドネシア人女性家事労働者の従属性を、自らの宗教、文化、倫理性を梃子にして転覆させ、優位あるいは対等な関係へと逆転させることに成功する。

以上を受けて結論では、ペン・サークル・フォーラム香港のメンバーが創作する文学テキストは、ジェンダー、国籍、宗教、職業による重層的な差別に対抗して、望ましい自己像を立ち上げる場となっており、「競合する語り」のなかで望ましいバランスを取ろうとする「主体性の操縦」が行われていることを明らかにする。このとき、バランスの論理的裏付けとなる手段がイスラームであり、イスラームは実践すべき教義としてだけでなく、経済的な自立、望ましい女性像、より良い雇用関係を確立するために利用できる「道具」としても機能している。すなわち、香港のインドネシア人女性家事労働者たちは、イスラームという「道具」がもちうるこのような機能を最大限に利用することで、より望ましい自己像を多様な社会関係の中で立ち上げ、親密性労働のグローバル化に応答していると言える。

【審査の概要—評価と問題点】

審査と最終試験では、本論文について、以下のような点が高く評価された。

何よりも、香港およびインドネシアにおいて忍耐強く足掛け6年間、密度の高いフィールドワークを実施し、インドネシア人女性移住家事労働者の実態を調査していることである。これらの調査に基づいて彼女たちの生活実態を既存の研究では見られないレベルで丁寧に記述することに成功している。

次に、国際移住家事労働者についての社会的な調査にとどまらず、彼女たちの文化的活動の一つであるイスラーム文学創作グループに着目し、その活動から生まれた文学作品を調査対象として、そこに現れる家事労働者たちの思いを汲み取り、移住家事労働者の心理的な内面にまで踏み込んで立体的に家事労働者の実態を明らかにすることに成功している。

とくに、文学テキストの分析によって、この活動が「ペンによるダアワ」という文化的宗教運動の側面を持つとともに、個人レベルにおいては精神的な救済をもたらしていることを解明している。第6章での「職業的・階層的従属関係を家族愛と宗教的連帯によって転覆している」という指摘はその優れた例である。

このようにフィールドワークと文学テキストの分析という二つの方法論を架橋した研究が、澤井氏の一貫した強い問題意識によって必然的に行われている点は本研究の優れた点である。

また、実践的エージェンシーと批判的エージェンシーが一人の主体において併存しているという著者の指摘は、インドネシアにおけるイスラーム的価値観のあり方を研究する上でも示唆的である。

このような高い評価を受ける一方で、以下のようないくつかの疑問点や要望も提示された。

全体としてインドネシア人女性家事労働者の主体性に焦点が当てられており、このこと自体は本論文の強みであるが、その代償として、彼女たちを取り巻く社会についての考察がやや薄くなっている。例えば、スウィドラーの議論を援用するにあたって、「社会的構造変化とは、エージェンシーの行う行為の意味が、文化によって媒介されることにより起こる」と述べていながら、具体的にどのように社会的な構造の変化が起こりえるのかについて十分な説明がなされていない。

また、活動中のメンバーの発言に比べて月刊ブレティンでの言説が「政治的正しさ」から逸脱しない範囲に抑制されていることの分析においても、月刊ブレティンの読み手の存在に言及するならば、分析がより明快になると思われる。

同様に、エージェンシーとアイデンティティの議論については、フーコーやギデンスによる議論なども視野に入れるならば、社会との関係性も取り込むことができ、議論の見通しがよくなると思われる。

インドネシアの出版産業の発展については、先行研究の業績を十分に咀嚼できていないところがある。また、「本の市」の重要性や文学コミュニティの拡大についての本論文の認識については、さらに検討を重ねる余地がある。

ポーレッタの「メトニミー」の概念が本論文の主張において有効に機能していないきらいがある。意味の転覆と再文脈化という分析自体は説得的であるので、ここにも検討を重ねる余地がある。

最後に、本論文の射程を超えていることではあるが、ペン・サークル・フォーラム香港で活動した家事労働者たちが帰国後、どのように「主体性の操縦」を続けているのかを明らかにすることは、次の研究テーマとして期待される。

この他、文章の表記、参考文献および脚注の整備などとも関連して、推敲に不十分な部分が残っていることが指摘された。

これらの疑問や指摘に対して、澤井志保氏は自身の見識に基づいて真摯かつ的確に応答し、審査委員を納得させた。本論文の問題点や限界についても十分な自覚をもっており、今後さらに研究を深める中で解決を図ることが期待される。むしろ、これらの疑問や指摘は、本論文の研究成果や学術的価値を高く評価した上で、研究の内容をさらに錬磨し、深めるべく提示されたものであり、本論文の意義を損ねるものではないことは審査委員全員の共通理解である。

審査の結論として、本論文は、グローバル化する親密性労働の現場にあるインドネシア人女性家事労働者たちが、文学創作活動の中でイスラーム的価値観を梃子として新たな主体性を立ち上げるプロセスを明らかにした重要な研究成果であるとともに、グローバル化時代における地域研究の一つのあり方を示すものとして地域研究に大きく貢献するものと認められた。

以上により、審査委員会は全員一致で、本論文をもって澤井志保氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるとの結論に達した。